

【執着義兄2・デート嫉妬編】

十五年間の『理想の兄』が嫉妬で豹変。

手を振り払ったお仕置きに露天風呂で潮を吹くまで汚され、  
依存確定まで墮とされる話

（大和視点特典付）

サンプル（一部抜粋）

「ほら、デートに行くんだから準備して。下で待ってる。」

大和はすっと私から離れて、頭を撫でて出て行った。

ほんの少しの時間だし、ほんの少し抱きしめられただけだし：

なんてことはない触れ合いなのに、幸せで心がいっぱいだった。

（中略）

「ゆい、手繋いでいい？」

「：うん」

ここなら私達は兄妹には見えない。

きっと大丈夫：そう思いながら差し出された手を握んだ。

指と指を絡め、ぎゅっと握り合う……  
それだけで鼓動がうるさかった。

（中略）

「あれ、ゆいちゃん？」

と聞き覚えのある男性の声が後ろから響いた。

慌てて振り返ると、そこには高校時代、私が憧れていた同じ部活の先輩が立っていた。  
私は急いで大和の手を振り払って

「悠斗先輩！ お久しぶりです！」  
と明るく再会を喜んだ。

「あ、いや！デートとかじゃなくて。

お、お兄ちゃんなんです！」

どうしてこんなにも全力で否定をしてしまったのか、自分でも分からないけれど……

「あ、なんだ、お兄さんか！」

じゃあ、また今度ゆっくり皆で集まろう！」

先輩が去って行った後、なんとなく気まずい感じがして大和の顔を見れなかった。

「…ね。

バレなくて良かったね。」

と意外にも優しい大和の声が降ってきた。

安心して顔を上げると笑顔の大和がいた。

口角が上がって笑っている、たしかに笑顔なはずなのに…一瞬目の奥が黒く光っているような気がした。

(中略)

宿へと案内され…部屋に入った。

「ゆい。せっかくだし露天風呂でも入ろう。」

「あ、うん！」

「…脱いで。」

大和は笑ってる。

ちゃんと笑ってるのに…目が怖かった。

「え、あ…そんなに見ないで、恥ずかしいよ…」

じっと見定められるような視線に戸惑っていると、大和の手が私の手首を掴んだ。

「やま…と…？」

「…一体いつになったら…ゆいの心まで手に入るんだろうね。」

大和は苦しうに眉間に皺を寄せ、私を見下ろしていた。

戸惑う私の手首を掴む手に力が入り、そのまま壁に押し付けられた。

「…待たない。」

もう十分…待った。」

大和は私の首筋にキスをしながら強引にスカートの中に手を入れてきた。

「やだ…」

「そう言うわりには自分から足を開いてるけど。」

いつもより低く冷たい大和の言葉に私は首を横に振った。

「…手、振り払ったよね。」

お兄ちゃんにはもう戻らないって言ったのに。

そんなにあの男が良かった？

久しぶりに会えて嬉しかった？」

大和の指が選んだ下着を目にする事もなく、中に入ってクリトリスを弾く…

「ひっ、あ…や…」

「こんなに濡らして。」

あの男の前で俺を『お兄ちゃん』として紹介したのはなんで。」

「…身体は正直なのに…心はずっと手に入らないんだな。」

(中略)

「…足、ちゃんと開いて。」

大和は私の足元にしゃがんで私の目を鋭く見ながら、そう言ってきた。

「ちゃんと見て。」

『お兄ちゃん』が、『妹』のゆいのクリトリスを舐めてるんだよ。

なのに喘いで自分から開いて、気持ちよくなっちゃうんだから。」

ジュルジュル音を立てて吸われて、中に指を入れられる…

「あぁっ、あ、い…っ　ぐく…あぁあぁ〜♡♡」

(中略)

「大和…?」

「…はあ。」

好きに…ならなきや良かった。

頭がおかしくなりそうだ。」

大和はそのままもう一度指を入れて、浅い所をぐいぐいと指で押し上げた。

「あぁあっ、ま…って…んあぁっ」

いつもとは違う、何か来そうな感覚が怖くて大和の首にしがみついた。

「…まっつて、あぁあ…っ、なんか変、来ちゃう

…っ~~~~~っ~~~~♡♡

腰が浮いたと思った瞬間、ブシャッと激しい水が吹き出す音が耳に入った。  
初めての感覚に、初めての経験に目を見開いた。

「…なに…」

「…気持ちいいの？」

潮まで吹いて。いけない子だな。

お兄ちゃんに汚されて吹いちゃうなんて。」

大和は冷たくそう言い放つと私を立てて、後ろを向かせた。

「そこ、手ついて。」

大和は私の突き出したお尻を両手で掴み、後ろから強引に膣に大きくなったソレをねじ込んだ。  
だ。

「んあぁ…っっ」

お腹の奥底から突きあげられる快感に、喉を潰すくらいの甘い悲鳴が漏れた。

（全容は製品版にて）